



Title	Eグループ : トランスナショナルな子どもたちが地域へ発信するには？
Author(s)	石川, 朝子
Citation	GLOCOLブックレット. 2012, 8, p. 116-121
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48324
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

III

グループワーク

課題の解決策の アイデアを考える

Eグループ： トランスナショナルな子どもたちが地域へ発信するには？

石川朝子 大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程

1. 参加者の属性

小学校教員2名(内1名は、日本以外に出自をもつ)、大学教員1名、大学院生4名、大学生1名、その他1名の計9名で、このうちトランスナショナルな子どもとして日本で教育を受けた経験を持つ参加者は2名であった。

2. 結果

課題「トランスナショナルな子どもたちが地域へ発信するには？」を遂行するために必要なアイデアとして最終的に挙げた18項目それぞれについて、具体的な内容、遂行することができると思われる期間、協働することができる機関や団体を以下に述べる。

アイデアを遂行することができる期間について話し合った結果、短期を1学期間、中期を1年間、長期を1年以上と設定された。これはアイデアとして出された内容が、学校で行うことを中心に考えられていることを受けて、学期内にできること、できないことを分けて考えていくことで、カテゴライズしやすいのではないかという意見が出されたことによるものである。

■短期(1学期間で遂行可能なこと)：

- ①地域でまつり(音楽・おどり)を開催する
ダンス発表会@地域のイベント学校、国際交流協会、NPO、保護者、自治体と連携して行う。
- ②学級・学校からの手紙(学校だより)を地域の方々にも配布する
なかなか学校のなかでどのようにトラン

スナショナルな子どもが学んでいるかを知る機会というのは多くない。学校と自治会が連携して、地域の方々には学校便りを配布するという案が出された。学校便りを配布し、地域のより多くの人にはまずは知ってもらうことから始められるのではないかとということで、短期に遂行できると分類された。

- ③マイノリティの子ども・若者による出前講座を行う

学校、国際交流協会などが連携し、リソースパーソンを選出し、NPOなどを中心に出前講座を行う。

- ④外国ルーツの子どもの保護者による母国紹介のミニ講演会・授業をする

学校と保護者、自治会が協働して行う。

- ⑤スピーチ大会を開催する

学校と保護者の協力のもと、市町村や教育委員会に呼びかけてもらい、スピーチ大会を開催する。

- ⑥地域で協働する

NPOと自治会が協働して、トランスナショナルな人々と地域の人々が共に清掃作業(ビーチクリーニング等)を行うことで、地域にすむ人々の交流を促進させる目的がある。これはすでにある地域で行われている取組であり、成果をあげていることが報告された。

■中期(1年間あれば遂行できること)：

- ①地域の祭りに民族衣装のファッションショー、音楽、料理の店を出す
保護者と自治会が連携して地域の祭りを

表1 テーマを遂行するために必要なアイデアと協働機関(Eグループ)

短期(1学期)	学校	国際交流協会	NPO	保護者	自治会	市町村	教育委員会
ダンス発表会の地域のイベント	○	○	○	○	○		
学校からの手紙(学校だより)を地域の方にも配布	○				○		
マイノリティの子ども・若者の出前講座	○	○	○				
外国ルーツの子の保護者による母国紹介のミニ講演会や授業	○			○	○		
スピーチ大会	○			○		○	○
協同一地域のためにビーチ・クリーニング			○		○		

中期(1年)	学校	国際交流協会	NPO	保護者	自治会	市町村	教育委員会	マスコミ
地域の祭りに民族衣装のファッションショー、音楽、料理の店を出す				○	○			
母国語ガイダンス	○	○	○				○	
インターネットの活用 映像作品をオンラインで発信する(動画サイトの活用)	○		○					
町内探検ツアー 地元の人を対象とする地域再発見のツアー	○		○		○			
まちづくりを考える 子どもまちづくり	○	○	○					
地域に住む外国ルーツの子の交流会(ミニオリンピック)を開き、マスコミに取材させる、学校・児童・PTA地域の人々 交流会	○	○	○	○				○

長期(1年以上)	学校	国際交流協会	NPO	保護者	自治会	市町村	教育委員会	マスコミ
学校の参観日を設定する	○			○	○		○	
母語による劇	○			○				
運動会・音楽会などをよりオープンに。課外活動の報告会(来場対象を保護者だけでなく、地域の方々も)	○						○	○
多言語放送	○			○				
地域NPO 親子の育成		○	○	○		○		
子ども会・町内会 復活運動	○		○	○	○			

開催する。保護者の方の得意な分野を地域で披露することで、地域とのつながりを促進する目的がある。

②母国語によるガイダンスを聞く

学校・国際交流協会・NPOなどの連携が必要。すでに各県・各市で広く行われている

る。母国語ガイダンスには他言語などのスタッフや教育制度についての知識をもつスタッフなどの配置が必要となり、リソースパーソンの確保に時間を要することから中期に位置づけられた。

③インターネットを活用し、映像作品をオンラインで発信する(動画サイトの活用)

学校とNPOが協力して行うことができる。すでにトランスナショナルな子どもとともに映像作品を作成している参加者から提案された。インターネットを活用することで、だれでもどこでもアクセスすることができ、また費用の面でも経費対効果が期待され、有効な手段であると意見が一致した。

④町内探検ツアーを行う

学校、NPO、自治会が連携して地元の人を対象とする地域再発見のツアーを行う。トランスナショナルな人々が、町内を生活者の視点から案内し、町のもうひとつの側面を案内する取り組みとして挙げられた。たとえば、すでに沖縄で行われている、高校生による移民の歴史に関する場所などをめぐり、説明をするツアーなどが報告された。

⑤まちづくりを考える

学校・国際交流協会・NPOが連携して行う。地域に住む子どもたち、トランスナショナルな子どもたちを含む地域に住む子どもたちが、共に住みよいまちについて考える機会をつくることについて提案された。

⑥地域に住むトランスナショナルな子どもとの交流会を開き、マスコミに取材してもらう。



写真1 アイデアを説明するようす

学校・児童・PTA・地域の人々の交流会を開催する。

学校、国際交流協会、NPO、保護者に加え、初めてマスコミという機関が登場した。マスコミに取材をしてもらうことで、広く多くの人に知ってもらうことができる。

■長期(遂行するには1年以上かかるもの)：

①学校の参観日を設ける

学校・保護者・自治会・教育委員会などの連携が必要。学校という性質上、一般の方に開いていくことがまだ難しい現状について話し合われた。

②母語による劇を行う(中国語劇などの発表の場を設ける)

学校・保護者の連携が必要。母語による劇は、トランスナショナルな子どもの自尊心を高めたり、アイデンティティの確立に有効だと意見があった。実際、多言語での劇をつくらうとすると練習など時間がかかるかと予想されるため、長期にカテゴリーされることとなった。

③運動会・音楽会・課外活動の報告会などをよりオープンにする(来場対象を保護者だけでなく地域の方々にも)。

学校・教育委員会・マスコミの協働のもと行う。地域の方にも学校に来てもらい、トランスナショナルな子どもが学校でどのように過ごしているのか実際に見てもらい機会をつくる。このためには、学校だけの努力ではなく教育委員会との連携が必要になってくる。

④校内放送を多言語化する

学校・保護者が連携して行う。保護者の方に学校にきていただき、休み時間など多言語での放送を行う。児童生徒が行う場合、保護者の方にサポートに入ってもらう。

⑤地域NPOを活性化させる

国際交流協会、NPO、保護者、市町村などが協働で行う。地域のNPOを活性化させることで住みよい地域をつくる。

⑥子ども会・町内会を復活させる

学校、NPO、保護者、自治会がこれを担う。子ども会や町内会が復活することで、地域としてどのようなまちづくりをしていくのがよいのか話し合う機会を増やし、トランスナショナルな子どもを巻き込んだまちづくりが可能なのは、という意見が出た。

グループE「トランスナショナルな子どもたちが地域へ発信するには？」のまとめとしては、次のようになった。“子どもたちが自ら積極的に発信できるようにするために、協働、持続性、地域性を考慮に入れた仕組みづくりが必

要とされている”。キーワードとして話し合いのなかで出てきたのは、“協働”、“持続性”、“地域性”の三つであった。具体的には、「子どもたちが自ら積極的に発信できるように」

- ・協働のためには今までの積み上げが大切
- ・これから協働できることもある
- ・すでに協働できている取り組みについても出し合った
- ・持続性が重要
- ・協働するにも地域性が関係してくる

とまとめることができる。

どの機関と協働できるのかの部分では、協働者としてあげられた機関のなかの「学校」に、比較的多く○がつけられており(表1)、どのアイデアも学校がメインとなっていることが見てわかる。子どもたちが集まる場所として学校がキーとなる活動が多くあげられた結果であるといえるだろう。

また、トランスナショナルな子どもに関わっている教育委員会や、学校や、担当者の先



写真2 結果を全体で共有するようす

生方が熱意をもってかかわっていこうと思っても、担当者がかかわってしまったり、転勤されたりしたときに、今まで積み上げてきた実践やつながりなどが、タイミング次第でがらりと崩壊してしまうときもあるのではないかと、という意見が出された。そのときに引き継ぎや、周りでしっかり固めて持続していく体制づくりが必要だという意見にまとまった。

「トランスナショナルな子どもたちが地域へ発信するには？」というテーマだったが、子どもたちだけで発信していくということは、初

めは難しいことかもしれない。最初はまわりの大人たちがしっかり仕掛けづくりなどのサポートをしていこうということが共通の認識としてあげられた。

3. 成果

Eグループは、学校関係者が多かったこともあり、学校を中心とした地域づくりに焦点が当てられて話し合われたように思える。学校の教員は多忙を極める実務のなかで、トランスナショナルな子どもとどのように関わるこ

〈参加者の感想〉

- ・外国の子どもたちの日本各地での実態について学ぶことができて本当に良かったです。外国人としてもっと日本が多文化共生に近づきますように頑張りたいと思います。
- ・実際活動されている方々とお話でき、沢山聴かせて頂いて、大変大きな刺激となりました。来年度からフィールドワークに出る際に、「子どもたちがどう発信したら、地域と繋がっているのか」を心にとめながら、今回学んだことも活かしてフィールドワークに行きたいです。
- ・それぞれの地域で、それぞれの人が自分の思いや考え方をもちながら活動をされていることがよくわかりました。着実に前に進んでいるような気がします。
- ・すでに多くの取り組みが各地でなされていることがわかってよかった。「トランスナショナルな子ども」は自己発信できる場合は、すべての子どもが自己発信している場だと思う。今後もういった情報共有ができればと思う。
- ・みなさんの活発で熱意ある取り組みを聞かせて頂き、今後自分がどういう立場でアクションを起こしていくか、改めて考えていきたいと思います！
- ・若い人たちが(外国にルーツを持つ人も日本の人も)真摯に考えることに感動した。当事者の一部である現場教師や教育委員会の人ももっと参加するとういと思う。
- ・今日はさまざまな背景を持った方の話が聞けてとてもよかったです。他の地域でなされていることやそれぞれの場所での問題の多様性を知れてよかったです。自分のやっている活動のために学んだことを参考にさせていただきます。ありがとうございました。

参加者の声

Gutarra Gargate Disner (大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程)

私が入っていたEグループでは、「トランスナショナルな子どもたちが地域に発信するには?」というテーマについて話し合った。話し合いに入る前に簡単な自己紹介の書いた付箋を見るだけで、その場に集まった方々が出身などを始め、多様な背景を持っていることが改めて分かった。さらにいろいろ聞きたいと思った。

まず、それぞれの知っている、もしくは関わっている活動などを取り上げることにした。みなさんが共通して挙げる活動もあり、共通としている課題も見られた。また、それぞれの立場から異なった活動も挙げられた。同じような活動を行っているようだが、それぞれの視点から問題を見ているのではないかと思い、今回のように全員が意見を出しあって、さまざまな角度で問題を考えるという貴重な機会だったように感じた。

明らかになった課題の一つとして、子どもが自分から発信していくことと思っても、自分たちでは限界があるため、周りの大人たちがその発信をフォローアップしていく必要があり、またそれができるための環境を一緒につくっていくことが大切であることに全員の意

見が一致した。やはり、外国にルーツを持っていることでマイノリティとされており、さらに、子どもであるという弱い立場を理解しなければならない。そして、それぞれの立場からどういったことができるだろうと改めて考えさせられた。

どのように子どもをフォローアップしていくと考えたとき、まず、学校にいる大人の役割の重要性について改めて気付かされた。子どもが一日の大半を学校で過ごすことから、学校からの働きかけは欠かせないのである。また、異文化理解を考えたとき、外国にルーツを持っている子どもの持っている素質を生かせるように先生の働きかけは大事である。また、外国にルーツを持っている子どもの保護者に協力してもらい、他の子どもやその保護者への異文化理解が深まるのではなからう。

このようにして、周りにいる大人の協力なしで、子どもが発信することが難しいとわかり、そういった子どもの周りにいる大人として、私たちに何ができるだろうと考えさせられた。

とができるのか、地域で子どもたちがどのように発信していくことができるのかというアイデアを日々考えていることが窺われ、大変刺激を受けた。

また、Eグループで出されたアイデアのなかには、既に実行されている素晴らしいアイデアが提出され、多くの地域でトランスナショナルな子どもに関わるさまざまな取り組みがなされていることを参加者が知り、今後の参考とすることが出来よかったと思う。当事者

の視点から自分がどのように学校や地域と繋がってきたのかを話した参加者もあり、今後大人だけの力で地域を変えていくのではなく、子どもたちの力でよりよい方向へと変えていくための手助けという視点が大切なのではないかと話し合われた。